
それでも私は死にたい

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも私は死にたい

【Nコード】

N4843Y

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

これはある二人の男女が真剣に自殺と向き合った物語。日本では毎年3万人も超える人々が自殺するという。

自殺する奴なんて、カスだ。したいなら勝手に死ねばいい。今までそう思っていた人もいるのではないだろうか？

だが、よく考えてみてほしい。この世の中、自殺してもいい人なんて一人もない。

人にはそれぞれ生きる意味、役割があつて、

目の前には歩むべき人生の道が続いている。
その途中でどんなに絶望を感じても決して
死んでもいいことはないし、死ぬべきではない。

人は皆誰しも生く先々で不幸に見舞われる。
だけど、同時に希望の光がその先にあることだってある。

今絶望を感じていて、自分の力で希望を見出せなくても、
誰かが力を貸してくれて、再び新たな光を見つけられる。
だから死んではいけない、たとえ何があっても……。

はじめに

自殺、人はなぜ命を自らの手で終わらせようとするのだろうか。よく自殺の動機でこう言う人がいる。人生に絶望を感じたからだと言っている。しかし本当に人が自殺する理由を、そんな短い言葉だけで片付けられるのだろうか。僕は到底信じていけない。

日本では毎年3万人以上もの人々が自殺しているという。そのほとんどが“人生に絶望を感じたから”、それが動機ならばどうにかして希望の光を照らせればいい。しかし実際にそれだけで多くの自殺志願者が自殺を踏み止まるとは思えない。もしそうならもっと自殺者が少なくなってもいいはずである。

だから現実とは違うのだろう、確かに結論としては“人生に絶望を感じたから”それが答えかもしれない。しかし背景にはその結論に至る非常に複雑に絡み合った大きな経緯がある。そのほとんどを解決できたとき、人はきつと自殺を思い止まる。だけどそれはとてつもなく困難で、現実的にかなり厳しいに違いない。

ただここで今一つだけ確実に言えることがある、人は絶対に自殺をしてはいけない。たとえ自分のために生きることができなくなったとしても、人には生きていてそれだけで大きな価値がある。その生を喜び、望んでいる人が必ずいるのだから……。

はじまり

私は美浜望、27歳。名前は望だけど、今私の人生には夢も希望もない。ただ絶望で満ち溢れている。

1週間前まで付き合っていた恋人、実は他に女がいて、突然その人と結婚することにしたと。それなのに私にあったのはたった1本の電話。ほとんど一方的な内容で、まとめると結婚することになった。だから別れてくれと。言い返す暇もなく切られて見事にふられた。あとで何度かけ直してもつながらなかった。

4日前まで勤めていた会社、何か大きなミスなんてした覚えはない。おそらくは会社の業績不振による整理解雇、所謂リストラに巻き込まれて肩を叩かれ職を失った。

3日前まで元気で仲良く暮らしていた両親。それはあまりにも急で始めはとても信じられなかった。近所のスーパーへの買い物の帰り、交通事故に遭って大型トラックに轢かれて亡くなったと。

すでに遠い親戚以外の身内は亡くなっていて、昨日までの葬儀が終わると実家に残ったのは私ただ一人。リビングのソファのテーブル、置かれていた写真立てに写る父と母の笑顔。悲しみが余計に増幅されて、断崖絶壁とてつもなく深い谷底へと私を突き落とされた。

2011年4月30日の土曜日、だから私は本当に来た、高波が押し寄せて尖った大きな岩が突き出た断崖絶壁の海の上。ここから飛び降りればほぼ間違いなく死ぬ、まず助かることはないだろう。そして私は目を閉じてゆっくりと歩を進めた……。

僕の名前は新山雪博、25歳。どこにでもいるごく普通の会社員。

仕事はたまにミスはするけど大きな失敗もなく、順調といいだろう。上司や同僚、後輩との関係も良好だし、高校生のときからお互いよく相談に乗っている親友もいる。両親は最近老けてきたけどまだまだ元気で仲良く暮らしているし、一人いる4つ下の大学に通っている弟もこの前、卒業後の就職先が決まったと明るい声で電話をくれた。今の人生に不満があるとすれば、就職して以来ずっと彼女がいないことだろう。

だからこんな僕の人生、まさかこれから自殺について本気で考えないといけなくなるとは夢も思っていなかった。それも自分のことではない、何度か会ったことはある相手だったけど、名前しか知らないほとんど赤の他人の自殺について。

ドライブの途中、たまたま立ち寄った高波が押し寄せて尖った大きな岩が突き出た断崖絶壁の海の上。僕はその上に一人の女性を目撃した、一瞬は同じように水平線の遠く眺めているのかと思った。だけど女性が急にゆっくりと崖の先に歩を進め始めたとき、僕は気が付いた、まさに今彼女は飛び降り自殺を図ろうとしていると。

主な登場人物

美浜望 27歳 身長162? 体重47?

この物語の主人公兼ヒロイン。最近立て続けに不幸と不運に遭遇し、人生に絶望を感じて自殺を図ろうとしているところを一人の男性に引き止められる。運命的な出会いに心を動かされ付き合いはじめる。しかし相変わらず精神状態は不安定なまま。それでも思い悩みながらも、自分の人生に少しずつ希望を見出ししていく。

新山雪博 25歳 身長176? 体重63?

彼女（美浜望）が4日前まで勤めていた会社で今も働いているサラリーマン。土曜日の昼間一人でドライブしていたところ、途中立ち寄った断崖絶壁の海の上で、飛び込もうとしていた彼女を発見して助ける。運命的な出会いを感じて付き合い始めるのだが、精神状態が不安定なままの彼女に振り回される。それでも彼女の自殺について本気で考え、なんとか希望の光を照らそうとする。

小林友哉 25歳 身長178? 体重68?

新山と同期入社で同じ部署に所属する親友。一緒に仕事をすることが度々あり、息が合う非常に仲のいい関係。お互いに悩み事があるとそれぞれ親身に相談に乗るようにしている。今回も彼（新山雪博）が美浜さんと付き合いはじめたこと知り、上手くいくようにアドバイスをしていく。また、自分は望の友人であった大橋さんと付き合い合っていて、最近結婚を考えている。

大橋志穂 27歳 身長165? 体重52?

望が会社に勤めていたときは最も仲の良かった同じ会社の友人。彼女がリストラされてからも何度か連絡は取っていたが、日に日に返信が遅くなり最後には何も返って来なくなっていたことに大きな

不安を感じていた。その後、彼（新山雪博）から彼女と付き合いはじめたことを聞き、二人の関係が上手くいくようにそれぞれの相談に乗るようになる。また、彼の親友である小林君と付き合い合っている。

佐藤水奈 24歳 身長153? 体重43?

彼（新山雪博）の元カノ。といっても付き合っていたのはもう高校時代の話で、今は同じ会社に勤めている友人の一人。お互いに恋人関係に戻るつもりはないものの、度々顔を合わせている所謂腐れ縁のような関係。彼に新しい彼女ができたことが気になっているが、自分も付き合っている相手がいるので嫉妬している訳ではない。ただ悪気はないのだが余計なことをすることがあり、それが二人に勘違いを抱かせることになる。

1、思い止まること1

何が私にそうさせたのかは分からない、だけど足場がなくなる一歩手前で立ち止まり、閉じていた目を開いた。ただ私は心の中にはつきりとした自殺への恐怖がある覚えはない。だからこの一瞬は恐怖心が抱かせた最後の躊躇ではなく、そこには何かもっと別の理由がある気がした。でもそれを今さら考える余裕があるはずもなく、唾を飲み込んで少し首を振ると、もう一度目を瞑ってみる。そして右足を上げていよいよ身体を投げ出していこうとしたとき、

「やめろ!!」

そう言う大きな声が聞こえると同時に左腕をつかまれて、私は一気に身体を引き戻された。直後何が起こったのか全く分からなかった。とにかく目を開けると、その先には微かに見覚えのある一人の男性の姿があった。

「大丈夫か？」

「うん」

「よかった、無事で」

「私、今死のうとしていたのに……」

口をついて出た言葉は自殺を止めてくれたことへの感謝の気持ちではない。あともう少して死ぬことができたのに、それを邪魔されたことの恨みと反感がこもっていた。

「やっぱり、そうか。ダメだ、自殺なんて、絶対。さあ、こっちに来て」

「えっ!?!」

すると言い返す暇もなく倒れ込んでいた私は起き上がらされ、半ば強引に身体を抱えられたそのまま彼の車の助手席に座らされ、シートベルトをさせられる。

「降りるなよ。このまま連れて帰ってやるから」

「待ってよ、私は今ここで……」

「ダメだ！ それは絶対！ さっき言っただろ」

「分かった。じゃあ、もうしないから降ろして！」

「そんなことできるか！ 信用できない。自殺はな一時の思い上がりかもしれないんだ、だからとりあえず今は頭を冷やせよ。さあ、行くぞ！」

そう言うと彼は私が抜け出す隙ができないよう、なんと助手席の上を跨いで運転席座り、左手で私の右腕をつかみながらエンジンをかけると、急いで車を発進させた。

2、思い止まること2

車が発進するとなぜか私は全身から力が抜けて抵抗する気を無くしてしまった。しばらく二人の間に会話は全くなかった。それでも彼は私の雰囲気気付いたのか、いつの間にかつかまれているけどもちろん簡単に自分の手で開けることはできるし、逃げ出そうと思えばいつでもできたと思う。自殺をしようとしていた身だ、怪我をすることは怖くなかったけど、逃げ出す気にはなれなかった。

「どうだ？ 少しは落ち着いたか？」

「うん、まあ」

「そうか、ならよかった」

「今どこに向かっているの？」

「僕の家の方向だよ。多分君の家もその近くだよ」

「知ってるの？ 私のこと」

「さっき思い出したんだ。美浜さんだよな、
×会社に勤めてい
る」

「そうだけど……。ちょっと待って、じゃああなたも」

「ああ、僕もその社員だよ。名前は新山雪博、よろしくな」

「うん」

「聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「いいよ」

「答えたくなかったら答えなくてもいい。なんで自殺を？」

「1週間前に彼氏にフラれて、会社もリストラされて、お母さんとお父さんも3日前に死んじゃった。そしたらもう生きていけない気がして……」

「それは……。なんて言ったらいいか……」

「いいよ、ごめん。これは私のことだから」

「でもな、自殺はダメだよ、絶対。美浜さんは何歳なの？」

「27歳」

「僕より年上か」

「あつ、でもいいよ、敬語なんて。堅苦しいから」

「分かった。あのさ、27歳ならまだまだ人生これからだよ」

「そうかな？」

「うん。今日は僕が一日付き合うから、何でも頼りにしてよ」

「ありがとう」

私は彼の変に余計な励ましをしないところに好感を持てた。こういうときあれこれいろいろ言葉をかけられて励まされるのは嫌だったし、そんなことで到底気が変わるはずもないと今も思っている。本気で自殺をするということは本来それくらい強い決意の基に成り立っているのだ。

だからこそ彼が見せくれたただ傍にいて支えてくれる、その姿勢が一番有り難かった。

3、思い止まること3

自殺を図ろうとしていた彼女との出会い、それは僕にとって酷く衝撃的な出来事だった。これから先彼女がどうなっていくのか、僕には全く予想もできないけれど、今日この一時、自殺を思い止まらせることができたのは本当に良かったと思っっている。

当然のことだが一度死んでしまった人間を生き返らせることは絶対にできない。しかしその人がどんなにも落ち込んで人生に絶望を感じて自殺を図ろうとしていたとしても、まだ生きてさえいれば、その身体にほんの少しでも生が灯されていれば、きつともう一度誰かが希望の光を照らしてあげることができる。

僕が希望の光を照らして上げられるかどうかは分からないけど、今彼女の一番近くにいる以上、できる限りのことをして上げたいと思う。そのためにはまず彼女のことをもっと知る必要がある、だから僕は思い切って彼女を自分の家に来るよう誘ってみることにした。

「そうだ、これから僕の家に来ないか？」

「えっ？」

「嫌だったら別にいいんだ。でもさ、今日はこのまま別れて君を一人にするのも心配だし、せっかくだから家に来てもらっているいろ話ししたいなって」

「……」

「余計なお世話だったかな？」

「うんうん、ありがとう。せっかくだからお邪魔する」

「よかった。じゃあ、家まであと1時間弱だからゆっくりしてよ。着いてから話聞くからさ」

「うん。……、私、ちょっと疲れた。寝るね」

「おやすみ」

「おやすみ」

そう言っと彼女はゆっくりと目を閉じて、安らかな寝息と共に深い

眠りに就いた。無理もないだろう、少なからずは残っていたであろう、死への恐怖を振り切って自殺を決意し、実行しようとしたのだから。おそらく相当疲れていたに違いない。僕は意外にも辛い表情を見せることなく、穏やかな様子のその姿にほっと胸をなで下ろした。

4、思い止まること4

今日はゴールデンウィーク最初の土曜日のせいか、海岸沿いの県道を抜けていくときは車が少なかったものの、街に近づいていくにつれて段々増えてきて、国道に入ってから20分ほど、遂に長い渋滞に捕まってしまった。家まではあと10キロもないのだが、この分だとあと30分以上はかかりそうだ。

周囲の車のエンジン音で騒々しくなってきたが、彼女は相変わらずぐっすり眠ったままで起きる様子はない。“はあっ”とため息は漏れたものの、一人で運転しているときより、心は落ち着いていてのんびりできているような気がする。自分が彼女を気にしているのは事実、好きとかそういう気持ちになっているのかは分からないけど、どこか波長は合っていて気が合いそうに思った瞬間だった。

時計はよく見てなかったけど向こうを出たのは大体昼の2時過ぎ、それから帰り道で渋滞に巻き込まれて結局アパートの駐車場に着いたときには4時近くになっていた。車を止めてエンジンを切ると、眠り続けている彼女には悪いけど身体を少しゆすって起こす。

「起きて！ 美浜さん！ 起きて！」

「ふあゝあ、はあっ。なに？」

「着いたよ」

「着いたんだ」

「行こうか」

「うん」

彼女は長い間眠っていたが、案外目覚めはいいようではつきりと僕の声掛けに頷き、二人は同時に車を降りた。

「ついて来て」

そう言っ僕はごく自然に彼女の手を握り、3階建てのアパートの自分の部屋203号室に案内する。

「ここが僕の部屋だよ」

「結構きれいなところだね」

「まだ築4年だからね。だけど街の外れだから家賃は安いんだ」

「へえー」

彼女の右手を握りながらポケットから鍵を取り出し、僕は右手で鍵を開けてドアを開いた。

「さあ、どうぞ」

「おじゃましまーす」

玄関から廊下を歩いて中に案内にすると、リビングのテーブルに座つてもらつた。

「ここに座つてて」

「ありがとう」

「お茶でも入れるね」

「うん」

僕はキッチンの冷蔵庫から麦茶を取り出し、それを二つのガラスのコップに注いで持って行き、彼女と向かい合つて席に着いた。

5、思い止まること5

私は彼が止めてくれなければ間違いなく自殺していたと思う。だから今一時とはいえ私を救ってくれたことには素直に感謝している。ただ、まだ心の中に幾分だが、“どうしてあのまま死なせてくれなかったの？ もう少しでこの辛い人生を終わらせることができたのに”、つまり邪魔しないでほしかったという気持ちも残っている。まだこれから彼と話すところなので、この先をどう生きようか、あるいはそれでも再び死を選ぶとするのか、それはよく分からない。しかし一つ思うことは、せつかくの機会だから決めつけるべきではないだろう、人生に多大な絶望が相変わらず存在しているとはいえ、彼と話した上で決めても悪くないと思っている。

今日の朝、家を出てから何も飲み物を口にしていなかった私、目の前に置かれたお茶を躊躇なく半分以上一気に飲み干した。

「喉乾いてたの？」

「うん、ありがとう。今日朝から何も飲んでなかったから」

「よかった。さてと、何から話そうか？」

「何でもいいよ、私、今思いつかないから」

「じゃあ、ちょっと1つ質問してもいいかな？」

「うん」

「もちろん答えたくなかったら、言わなくていいよ。まずは……、今でもまだ死にたいと思ってる？」

「うーん……、半々な」

「そっか。まあ、そうだよな。さっきまでしようとしていたことで、そう簡単に気が変わる訳ないもんな」

「うん、ごめん」

「いいよ、謝らなくて。実はさ、今ここで、思い切り励ましたりして自殺を思い止まらせようとは思ってないんだ」

「えっ!？」

「本気で自殺を決意していた、それは君を見ていて感じた。いくら人生に絶望を感じていたとしても、人が自殺を決意する。それは並大抵のことじゃない。だからちょっとそつとこのことで気持ちが変わることは多分ないと思う」

「うん」

彼が私と全く同じ考えだったこと、そこに共感を覚えて一度頷く。

「でもね、そうは言っても、僕は君の自殺をさらさら許す気はない」
「うん」

「だから、時間をかける必要があるかなって」

「時間？」

そう彼に聞き返したとき、その後に続いた言葉はとても思いがけないものだったけど、強い運命を私に感じさせた。

6、思い止まること6

「うん。それで、しばらく僕と一緒に暮らしてみないか？」

「……。それって、同棲するってこと、私たち」

「まあ、そういうことなるかな」

別に彼女のことを一人の女性として意識していた訳ではない、特に好きだと思っていたのでもない。冷静になっていろいろ考えて、話していて、彼女を諭しているうちに自分でも思いかけず、そんな結論に至ってしまった。

つまり今僕は図らずも彼女に“好きだ”と告白したことになる。だけれどもなぜか戸惑って心が焦るようなことはなく、むしろ自分が導き出した素直な彼女への想い、愛を率直に受け入れることができた。

「ねえ、ちょっと聞いてもいい？」

「うん」

「同棲するってことは、私たち付き合っただよね」

「そうだね」

「新山さんって、私のこと、好きなの？」

「好きだよ」

僕は彼女の質問に対して何の躊躇いもなく自然に返事ができた。もちろん自殺しようとしていた彼女に同情して好きになったのではない。多分、まだ短い時間だけれど一緒に時を過ごしてみて、その雰囲気引かれて好きになったのだと思う。

「ありがとう。でもね、私、まだ自分の気持ちがよく分からないんだ」

「そっか。じゃあ、ゆっくり考えてよ。無理しなくていいからさ」

「うん」

彼女は頷くと残っていたお茶を少しだけ飲んで、僕からちょっと視線を逸らした。今彼女は自分の気持ちを僕の想いと照らし合わせて

考えてくれているのだと思う。“一人になりたい” なんとなくだが
彼女がそう思っているのではないかと感じた僕は、そっと席を離れ
寝室に入って扉を閉めた。

7、思い止まること7

彼は私の気持ちを探してくれたのか、リビングで一人にさせてくれた。彼に告白されて私は少し混乱したけど、ちょっとだけ一瞬心がときめくを感じた。多分、私も彼のことを少なからず好きになっっているのだと思う。

ただこれから先付き合いはじめて一緒に生活していくとなると、それには酷く不安を覚えた。なによりも私自身が彼にたくさん迷惑をかけることにならないか心配だった。当然だけど私は会社をリストラされているから今は全く収入がない。となると金銭的には彼に大きな負担を強いことになる。精神的な面での不安もあった、私はまだ人生に絶望を感じていることには変わりはないし、彼を私の心の闇に引き込んでしまう可能性だってある。それに何よりも1週間前と同じように、いずれまたフラれて一人になってしまうのではないか。

そう考えるといつそのこと彼の思いを受け入れるのではなく、それを忘れてしまえるように今ここで命を絶ってしまった方がいいのではないだろうか。

そう一度考えが巡ると、私の心はもう無意識のうちに終着駅へまっしぐらだった。席を立ち上がると徐にキッチンに向かい、下の戸棚の中から包丁を取り出した。水道の蛇口をひねり、流れ出す水に左手首を差し出す。そして右手に握っていた包丁を……、

「やめる！」

「えっ!?!」

そう彼の声がするといつの間にか右手から包丁が取り上げられ、間もなく二度目の自殺も阻止された。

「一人にしたのは失敗だったか。でも、良かった、間に合って」

「ごめんなさい。私……」

「いいよ、謝らなくて。不安になったんだよな、僕に迷惑をかけな

いか」

ふと我に返って頭を下げた私、だけど彼にはすべてお見通しだった。
「うう、うん」

私が頷くと、彼は右手に握っていた包丁を元の場所にしまい、水道の水を止めて、両肩に手を置いて視線を合わせて告げた。

「いくら迷惑かけても、構わないよ。全て受け止めるつもりだからさ」

「……いいの？」

「大丈夫だよ、全然。それに僕、思うんだ。人を愛するというのは、自分の想いただけ一方的に伝えるだけじゃなくて、相手の想いも全てを受け止めるものじゃないかって。だから君には僕を信じてほしい、たとえどんなことになっても絶対に愛し続けるからさ」

彼のまっすぐ見つめる視線は紛れもなく真剣で、私の心の真ん中に深くに突き刺さった。そうして芽生えたのは愛、気付いたら私も同じように彼を愛し始めていた。

8、思い止まること8

彼女の精神状態がまだ不安定なことは僕も十分把握していた。だからこそそういう意味で一人にしたのは大きな賭けだったし、もう一度自殺を図る可能性もあると思っていた。ただいつ彼女の様子を確認しに行くのか、そのタイミングが難しかった。あまり早く見に行っても再度自殺なんて図ってなくて、返って気まずい雰囲気になるかもしれない。逆に遅すぎてももう手遅れの状態になっていることも考えられる。

今回、彼女は悪い予感か的中して自殺を図ろうとしていたけど、寸前で引き止めることができた。その上で今僕が伝えた言葉、まだ彼女は少しうつむいて黙っているけど、きつと心に響いるに違いない。「私も新山君のことが好き！」

彼女の答えはイエスだった、一度は自殺をしようとするほど悩んでいたけれど、最後には前向きで最高の笑顔を僕に見せてくれた。ただはつきりとした確信はない、だけど彼女が何かしら今日これまでに変わったのは確かだった。

彼女が今僕の告白を受けてくれたこと、もちろんそれも嬉しかったけど、何よりも自分が少しでも希望の光を灯せたのが一番の喜びになった。そしてそれは僕の気持ちを一気に沸騰させた、抑えきれなくなつて目の前の彼女を思い切り抱きしめた。

「新山君……、私……」

「ごめん。僕、嬉しくて……」

「うんうん。いいよ、私も嬉しい……、ありがとう」

「……………、ありがとう」

強く、強く抱きしめ合った二人、感動のせいか目にいっぱい涙が溜まり、それが何度も、何度も零れ落ちて頬をつたった。そのまま僕らは時が経つのも忘れて、ずっと一緒に時間を過ごした。

9、彼の温もり1

私は突然彼に抱きしめられたとき、お互いの身体が触れ合って一瞬すぐドキツとした。少しあつたかもしれない、彼にまだ身体を密着させることへの抵抗感。だけどそれを遥かに上回って、すぐに私は彼の温もりを求めていた。

まだ付き合いはじめて間もないカップルが、愛を最も感じられる瞬間は何だろうか。例えば、手をつないだとき、キスするとき、抱きしめ合うとき、セックスをするとき、全て愛し合う二人だけがすることだけど、人それぞれ、その行為で得られる感覚は全く違うと思う。

私には1週間前まで付き合いっていた彼がいた。彼との関係は大体1年近く続いたけれど、その中で一緒の時間ときを数多く共有し、キス、デートやセックスなど、恋人同士がすることはほとんど全て経験した。そうしてたくさん彼の温もりを感じてきたつもりだった。

しかし今この時間に彼に抱きしめられて感じた温もりは、その全てを大いに超えていた。この違いはおそらく愛する気持ちの強さによるものだと思う。彼は間違いなく本気で私を愛してくれていた。そしてもちろんそれだけではない。愛し合うもの同士で生まれる温もりは、お互いの愛する気持ちと呼応し合って初めて形になる。今回は私が彼を愛する気持ちも今までで一番強く感じられたし、だからこそその温もりを強く、強く感じられた。

10、彼の温もり2

もちろん僕には今付き合っている彼女はいない。ただ高校時代に今も偶然同じ会社に勤めている佐藤さんと付き合っていた。卒業前に別れてから現在までずっと彼女はいなかったけど、その高校にときに彼女とデートしたり、キスしたり、セックスをしたりして関係を深めて、お互いの温もりをたくさん伝え合った。

しかし、今彼女を抱きしめて身体に伝わってきた感覚、温もりは遥かに大きくて、いつまでも離れずにと一緒に過ごしたくなっていた。まだ彼女とは初めてで自分の心の中にどんな想いが芽生えているか正確に分からないけど、一つだけ事実として今までの誰よりも“愛している”、それは間違いなく確信が持てた。

結局何時から抱きしめ合っていたか分からないけど、その終わりは心理的なものではなく身体的なもので訪れた。

「ねえ、新山さん」

「何？」

「私……、トイレ行きたい」

「あつ、ごめん。いいよ」

そう言っただけは彼女の腰に回していた両腕をそつと緩めて解放した。当然と言えば当然である、時計を見るともう7時半過ぎ、二人はおそらく5時から2時間半以上もずっと抱きしめ合ったままだったのだから。僕も意識していなかったけど、彼女と同じように今はトイレに行きたくなっている。彼女が戻ってきた後、

「僕もちよつと……」

その場を離れると僕はトイレを済ませ、二人は再びキッチンで向かい合った。

「さてと、時間も時間だし、夕飯でも食べようか？」

「うん」

夕飯に誘うと笑顔で頷いてくれた彼女。前にこんな話を聞いたことがある。おいしい食べ物を前にすると人は会話が弾むと。せっかくのいい機会だから僕は彼女といろいろ楽しい話をしたいなと思った。

11、彼の温もり3

彼に夕飯に誘われた私、車でどこか街に出るのかなと思ったけれど、意外にもアパートから歩いて3分もないところにあるファミレスだった。しかしいきなりいいお店に連れて行かれるのも気が重くて嫌だったわたしは、返って日常の雰囲気のまま過ごせそうに嬉しかった。

「ここでいいかな？」

「うん」

私が頷くと彼は入り口の扉を開けてくれて二人は中に入る。すでに7時半を回っているせいか、店内にそこまで人はなく、家族連れもないせいか思いのほか静かである。私たちは女性店員によって、道路が見える窓側の禁煙席についた。

「先に何か飲み物だけ頼む？」

「うん」

「じゃあ、ホットコーヒーでいいかな？」

「お願い。ありがとう」

「ホットコーヒー、二つ」

「かしこまりました」

店員は注文を受けると私たちのもとから離れていき、他に周りに客がいない中で二人きりになる。

「ごめんな、こんなところで。実はさ、今持ち合わせがなくてさ」

「うんうん、いいよ、気にしないで」

「そうか、よかった」

ここで一度二人の間に沈黙が訪れる、理由はなぜだか分からないけど、あえてそれを予想するなら彼は何かから改めて聞くべきか迷っているのだと思う。彼が先ほどしてくれた告白、できる限り平常心を装っていたのだと思うけど、内心はかなりドキドキしていたはずに違いない。それを受けて今は幾分頭の中が整理できていないのだと

思う。

比べて私は温かく優しい彼の言葉だったり、長く抱きしめてもらえたりして、すごく心が落ち着いて気持ちに少し余裕ができた気がする。

「お客様、ホットコーヒーを二つお持ちしました」

「あっ、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

そんなタイミングで二人の前に温かいコーヒーが二つ並ぶ。再び店員が離れて行って、何も入れずに一度口に含む彼。カップが皿に置かれて、一息吐くとほぼ同時に私は彼に話しかけた。

12、彼の温もり4

「ねえ、新山さんって、会社で何の仕事してるの？」

「僕は営業だよ。まあ、まだ下っ端だけどね。美浜さんはどこにいたの？」

「私はイベントの企画とか。でも、リストラされちゃったけど」

「僕も同僚から聞いたよ、最近うちの会社業績不振で整理解雇があったって」

「私、その煽りを受けちゃったみたい」

「そっか。理不尽な話だよな、リストラって。会社の勝手な都合で」

「うん。だけど、しょうがないよね」

「まあ、自分でどうこうできないからな。あつ、でもさ、美浜はこれからどうするつもりなの？」

「えっ、さつき一緒に住むって……」

「そうだけだよ。ほら、今まで自分が住んできた家とか、これから仕事をするとか、しないとか」

彼に言われて初めて気が付いたけど、どちらも当然考えないといけないことだ。しかし実のところを言うと前者はとっくに解決している。私は昨日時点で自殺を決意したとき、自分が今まで住んでいたマンションの部屋は引き払っていて、家具一式や電化製品や服や小物などはほとんどごみに出してしまった。実家は親の持家だったが生前、生活に困っていたらしく借金があり、相続税と合わせて貯金と遺産はほぼ吹き飛んでしまった。唯一残っているのは今日着ている服と母親から成人のお祝いにもらった星形のペンダントと、ポケットの中にある財布とハンカチとポケットティッシュ、そしてなぜか解約しなかった携帯くらいだ。これは自分が自殺を思い止まることがないよう、予め後戻りできないようにした処置だった。

「実はね、私、今ほとんど着の身着のままなんだ」

「えっ、じゃあ、もしかして……」

「ないよ、家も家具も電化製品も服も、化粧とかの小物も全部。あ
るのはポケットの中のもの、この首のペンダントぐらい」

「そうだったのか」

「自殺を思い止まりたくなってね」

「それほど強く決意していたんだね」

「うん。でも、ありがとう、引き止めてくれて。まだ、言ってな
かったよね」

「そういえばな。嬉しいよ、僕、美浜さん、大分明るくなってみた
いだから」

「新山君のお蔭かな。ねえ、そろそろ頼もう」

話しながらもこっさり注文する料理を考えていた私、おそらく彼は
決めていないだろうけど、そう不意打ち気味に提案した。

13、彼の温もり5

「そうするか。すみませーん！」

私は自分の提案で彼が困ると思っていた。しかし予想に反して彼は手を挙げて店員を呼ぶ。すると最初に私たちを案内してくれたのと同じ女性店員が駆け寄ってくる。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「はい。いつもので」

それは完全に予想外の言葉だった、まさかファミレスで“いつもの”を通用させる人がいるとは。となると彼はよくここに来ていていつも同じ店員の人に同じメニューを注文していることになる。もしかして彼女とはかなり親しい間柄にあるのではないだろうか。そう思うと頭に大きな不安がよぎった。

「はい、かしこまりました」

「何にするの？ 美浜さんは」

「えっ。じゃあ、このハンバーグプレートで」

「はい。では、ご注文を繰り返します」

店員の人が言うのと私たちの注文が確認されて、すぐにこの席から離れて行った。私は少し聞くのは怖かったけど、これからのこともあるし勇気を出して聞いてみた。

「ねえ、今の“いつもの”って？」

「ああね。実はさ、僕、ここにはよく来るんだ。それにいつも同じもの注文してるからね。でも、さっきのはあの店員さんにしか通用しないけど」

「それじゃあ……、もしかして」

「違うよ。確かに友達の人だけど、あの人はちゃんと結婚してるから」

「そうなんだ、よかったー」

私は彼からそう聞いて安心し、ほっと胸をなで下ろした。

「でも、大変だよな。こんな時間なのに働かないといけないなんて」
「うん。夫の収入が少ないのかなのかな？」

「そんなところだろうね」

「あつ、あのさ、話変わるけど私たち、苗字で呼び合うのやめしない？」

まだ本当に付き合いはじめてから数時間とはいえ、もう立派な恋人同士な二人。やっぱりより親しくなっていくためにも、お互いに苗字以外で呼び合いたいと思っていた。

「それもそうだな。なんて呼んだらいいかな？」

「何でもいいよ、お好きなように」

「それじゃあ、望さんで。年上だしね」

「分かった。新山さんは……、ひろ君でいい？」

「いいよ」

「じゃあ、お互いに呼び合ってみよう」

「うん」

「私から。ひろ君、これからよろしくね」

「こちらこそよろしく。望さん」

こうしてお互いに呼び合った二人、そうするとすぐく距離が一気に縮まって、彼をもっともっと近くに感じられたような気がした。

14、彼の温もり6

そういえばさっき彼は“いつもの”と言って注文したけど、いったい何を頼んだのだろうか。気になった私は質問してみる。

「ねえ、ひろ君」

「何？」

「さっき何注文したの？」

「ああね。それはね、……これだよ。ミックスグリルと大盛りライス」

彼はお互いに手に取っていなかったメニューを開いて、真ん中ほどのページにあるミックスグリルの写真を指差した。それによるとハンバーグとウインナーソーセージ、さらに大きなエビフライが乗っているもので、値段は760円と安く、ライスも大盛りで150円なので、合わせてもたったの910円、かなり手ごろでお腹いっぱいになりそうだった。

「結構食べるんだね」

「まあね。今日は、お昼はコンビニおにぎり2つだけだったから」

「そっか。あつ、あのさ、今日はドライブの途中で私を見つけてくれたんだよね」

「うん、そうだけど」

「その前はどこを走ってたの？」

「朝10時前くらいに家を出て、海岸沿いをずっとだよ。途中で海水浴場がある所の駐車場に車を止めて、ちょっと砂浜を歩いてそこで昼ご飯を食べて、そのあと君を見つけたのが午後2時ちょっと前くらいだったよね」

「うん。でもよく見つけられたね、車を運転しながら」

「いや、実はさ。あそこ駐車場があっただろ、一応新里岩っていう観光地なんだよ」

「えっ、だけど誰もいなかったよ」

「今日は曇ってたからね。晴れていたら水平線がともきれいに見えるらしいよ」

「そうだったんだ。つまり、元々寄る予定だったってこと？」

「そうだね。まあ、実は曇ってたからやめにしようかと思って思ったんだけどね。けどさ、せつかくだからと思って。だけど、寄ってよかったよ、お蔭で望さんに巡り合えたから」

「私もよかった、ひろ君が寄ってくれて」

「もしかしたら、僕らの出会いって運命かもな」

「運命か、信じてるの？」

「多少わね。全部そうとは思わないけど、どこかで運命の巡り合わせってあるんじゃないかなって思ってるよ」

「私も……」

彼との出会いは私にとって非常に強い運命を感じさせた。彼に出会わなければほぼ間違いなく自殺していただろうし、もちろんこうやって一緒に話したり、ご飯を食べたりすることはできなかった。

人はいつ何時不幸が重なって追い込まれることになるか分からない。それでもそこで必ずやみんなが自殺を思い立つわけでもないし、仮にしようしたとしても何かがきっかけで思い止まることも十分にある。そういう意味では私は偶然彼に見つけてもらったからこそ思い止まることができ、これから先の人生に希望の光を少なからず照らしてくれた。

15、彼の温もり7

僕が話の流れから頭にふと浮かんできた運命のこと、彼女も同意してくれて“私も”と呟くとお互いに目を合わせたまま沈黙が訪れた。しばらくして少し視線を落としたのは彼女のほう、正確には分らないけれど、ちょっと一人で考えるのに浸りたい、おそらくそんな心理のサインだと思う。合わせて僕も視線を少し下に逸らした。今そばにいるからといって、ずっとそばにいるからといって、いつも話し続けるのは恋人同士でもたとえ無理があると思う。基本的に誰でも一人になる時間があるものだし、仮にそうでなくても一人にさせてほしいときはある。それは目の前に一番好きな人がいても同じこと、示し合わせて話すのをやめて、それぞれ一人の空間に入っただけを巡らせることでより相手のことを理解できたり、自分がすべき接し方が見えてくるのだと思う。

僕が今考えていること、それは彼女にこれからどうやって希望の光を照らしていくのかである。これは精神状態が不安定なままの彼女に対して最も優先させなければならぬことで、もしこの点で最初の一步を誤れば、僕が仕事に出て行って一人になったときにまた自殺を図る可能性も十分考えられる。そのときは当然のことながら止めることなんてできないし、何か言葉をかけて上げることなんて…

…、
「あつ！」

僕はここまで考えて思わず声を出してしまった。

「どうしたの？」

「あのさ、望さんて携帯持ってる？」

「あるよ」

「使えるよね」

「うん。なぜか解約しなかったのよね、すごく不思議なんだけど…」

…」

「よかった。じゃあ、アドレス交換しよう」

「そうだね」

二人はそう言って赤外線通信でアドレスを交換する。彼女が携帯だ
けなぜか解約しなかった理由、それは誰に止めてもらいたかった、
その最後のわずかな心残りだと僕は思う。だからこそ彼女は僕に自
殺を止められたとき、案外すんなりと思いつまったのかもしれない。

「僕が仕事中のときでもいいからさ、好きなときに連絡してね」

「分かった、そうする」

こうして連絡手段が確保できたこと、それは彼女をいつでも心理的
に救い出せる点で、二人にとって非常に大切な第一歩だった。

16、彼の温もり8

アドレスを交換してから1分もしないうちに、二人の前に料理が並んだ。ファミレスは他に客が少ないと、とんでもない早さで来ることがほとんどで、それが一番の魅力である。

「おいしそう。いただきまーす！」

「いただきまーす！」

二人はナイフとフォークを手に早速食べ始める。

もし今日命を絶っていたら当然食べられなかったはずの晩御飯、単なる出来合いのハンバーグなのに、私にはとても特別なものを感じられた。

「あー、やっぱり、美味しいな」

「うん、おいしい」

一口食べて思わず口にした言葉、それは素直に本当に美味しいと思っただけである。こうやって生きてご飯を口にできることの有り難さ、そして大好きな彼と目の前で一緒に食べられるのがまた最高に嬉しかった。

二人はご飯を食べている間、そのことに集中していたせいか、ほとんど話さずに再び考えを巡らせた。私はさっき交換した携帯のアドレスのことを思っている。まずなぜか携帯を解約していなかったこと、昨日の時点で人生を終わらせるためにやるのが多過ぎて頭が回らなかった、それもあるけど、本当は誰かに止めてもらいたかった、その心残りがどこかにあったのかもしれない。実際彼に引き止められたとき、最初は“なんで止めたの！”と強い怒りを覚えたけど、今はこうして人生をまた楽しく歩み始めることができ、彼に感謝の気持ちを抱きつつある。

しかしそれでも私は精神状態が不安定であり、いつ何時また不安な気持ちに陥って自殺を思い立つかわからない。だからこそ先ほど確

保した彼への連絡手段、行動に移すよりも前にまずは電話をかけて話をすること。きつとどんなことでも彼が話を聞いてくれて、私を落ち着かせて、思い止まらせてくれる。それが二人を悲しい結末へと向かわせないために、最も大切なことだと私は認識した。

17、二人の気持ち1

ご飯を食べ終わって二人が家に帰り着くと、すでに9時近くになっている。私は食べ始めてからほとんど話しかけなかったし、彼もあまり話してくれなかった。だけどそれが別にいやだったわけではなく、むしろ温かい目で私を見つめてくれて、安心できる空気にしてくれることが素直に嬉しかった。それと後半はこれから家に帰って何をするのか、それをちょっと考えてしまっただけで話しかけにくくなつたのもあるのかもしれない。

再びリビングのテーブルに腰掛けて、彼は正面のベランダの右横にあるテレビをつける。

「何か見たい番組ある？ それともお風呂先入る？」

「見たい番組はないかな。お風呂はシャワー？」

「入れるよ。さっき出る前にセットしておいてから」

「じゃあ、お湯、先もらっていい？」

「いいよ。あつ、そういうえばパジャマないよね？」

「うん」

「僕のジャージでよければ貸そうか？」

「いいの？」

「もちろん。ないと困るからね。待ってて、ちょっと持ってくるから」

そう言うと彼は寝室からすぐに上下のそろった黒いジャージとTシャツを1枚持ってきた。

「こんなのしかないけど、いい？」

「大丈夫、ありがとう」

「それじゃあ、待ってるよ」

彼はそれだけ言うとテレビのほうを向いてチャンネルを回し始める。ここで私は勇気を出してこれから二人でどうするのか聞いてみる。

「ねえ、あのさ」

「何？」

彼は意識をそこまでテレビに向けているわけではなく、すぐに振り返って反応してくれた。

「今日、これから私たち、どうするの？」

「そうだな……、望さんが出たら僕も入って、それからのんびり過ごして一緒に寝る、そんな感じかな」

「……えっ？」

「どうしたの？」

意外だった、彼が何もえっちなことを口にしなかったから。でも今の答えはある面で曖昧だし、もう少し突っ込みを入れてみる。

「いや、しないのかなって？ 二人で」

「あはっ、そういうことか。しないよ、今日会ったばかりだしね。

それにまだするにしても気持ちの整理がつかないだろ」

「まあ、うん」

「安心してよ、何もしないからさ」

「ありがとう。あっ、でも、一緒に布団で寝るくらいならいいよ」

「そうか、分かった。そろそろ、入ってきな」

「うん」

今の一緒に布団で寝たいというのはサービス精神ではなく、素直な私の気持ち。彼が言ってくれた通り、まだセックスするには流石に気持ちの整理がつかないけど、一人で布団に入るのは不安だし、彼の温もりを感じて眠りにつきたかった。

18、二人の気持ち2

僕が貸して上げたジャージを持って風呂場に消えていった彼女、一方自分はテレビがついたままのリビングで先ほど聞かれたことについて考えてみる。男は基本的に欲望に対して正直な生き物だけど、セックスは男女の関係においてとても重要なものだから、考え方は人それぞれだと思う。恋人や夫婦は子どもを作るといいう生殖機能的な目的以外に、自分たちが愛し合う気持ちを確かめ合うためにセックスをする。今は避妊具があつて子どもができるのは避けられるが、それでも決してその行為は単に軽い気持ちでするべきものではない。なぜならたった1回でもものすごくお互いの距離が縮まることもあるけど、その逆で二度と取り返しがつかなくなつて別れる原因になる可能性があるからだ。

もちろん僕は男として隣同士で一緒に寝ることができるなら、セックスはしたくならないはずがない。いや、むしろ自制心を幾分か緩めてしまえば、彼女を有無も言わず抱こうとしただろう。ただ、そんな浅はかな自らの欲望だけで彼女を傷付けたくないし、精神的に不安定な状態なところをさらに追い込むかもしれないようなことは絶対にしたくなかった。

でも、彼女が最後に言ってくれた一緒に布団で寝たいというのは、素直に嬉しくて、自分が信用されていると実感できてよかった。まだ二人は付き合いはじめたばかりだけど、先を急いでセックスなんてしなくても確実に距離は縮まることが認識できた。

そこまで考えて急に彼女と一緒に布団で寝ることが想像された。人の身体とはついつい正直なもので、頭の中では状況を理解できいても反応してしまう。全身がなんだか温まってきて、テレビからの情報は全くといっていいほど入ってこなかった。

彼女が風呂に入り始めてから20分、ドアが開く音が聞こえて、袖が余ったジャージ着て少し濡れた髪に触れながら上がってきた。

19、二人の気持ち3

彼女が身に付けているのは僕の貸した単なるジャージ、けど不思議なもので風呂上がりだとなぜか妙に色っぽく見えてしまう。こつこつと意識して見つめてみるとすつぴんでも、先ほどの化粧しているときと変わらずかわいい感じだし、肩の下少し腕にかかるまでの長い髪は黒く毛先がそろっていてかなりきれいだ。おそらく痛んでいる様子がないところから、普段もあまり髪を染めていないのだと思う。

「どうしたの？」

「あつ、いやつ、きれいだなって」

「……」

火照っていた頬がさらに赤くなる彼女、恥ずかしがってはいるものの素直に喜んでるようにみえる。

「……嬉しい。ありがとう」

「じゃあ、入って来るね」

「うん」

彼女の反応に自分も思わず顔を赤らめそうになって、それを隠すようにパジャマを持って足早に風呂に向かって行った。

10分後、パジャマ姿でリビングに戻ると、テレビは消されていて彼女は椅子に座り麦茶を飲んでいた。少し湯気が立っているのは、電子レンジで温めたのだと思う。

「おつかれ。あつ、お茶もらってるよ」

「ごめん。用意しておいたらよかったね」

「うんうん、いいよ。そうだ、あのさ、ひろ君がよかつたらちよつと早いけどもう寝たいなって」

彼女がそう口にした理由、察するに今日はいろいろあってかなり疲れを感じているからだろう。それは僕も同じで風呂に浸かってホッ

とすると、急に身体が重く感じて疲れが溜まっているのを実感していた。

「そうだな。そうしようか」

「うん」

お互いに頷いて彼女は残っているお茶を飲み干し、僕も冷蔵庫からお茶を出して1杯飲むと、一緒に寝室に入り布団をひいた。洗い替え用にあつたもう一つの枕、合わせて二つが布団に並ぶと、電気を消して向かい合って中に入った。

「ねえ、抱きしめてもいいかな？」

「うん、大丈夫だよ」

「ありがとう」

「おやすみなさい、ひろ君」

「おやすみ」

気分は高揚せず予想以上に落ち着いていて、お互いの穏やかな心臓の鼓動を感じながら二人は深い眠りについた。

20、朝日の輝き1

次の日の朝、私は少し開いていた窓のカーテンの隙間のわずかな光に照らされて目を覚ました。腰には彼の手が乗ったままで、規則正しく寝息を立てていることからまだぐっすり眠っているのが分かる。枕元に置かれた目覚まし時計は5時半前、どうやらこれから朝日が昇ってくるようだ。

私は彼を起こさないようにそっと布団から抜け出し、立ち上がって窓の外で太陽が昇り始めるのを見つめる。一日は0時00分から始まるのではない、この地球上をある一定の周期で太陽が照らす限り、その日の出とともに一日が明けるのだ。もちろん私も27年間生きてきた以上、この目で何度も朝日が昇るのを目の当たりにした。しかしもしも昨日彼に救ってもらえず、あのまま自殺していたら今目にしている光は絶対に見られなかった。

そういう意味で今日にまつすぐと入る光は白く、とてつもなく明るくて、とても特別なものに感じさせられた。

「きれいだな」

「えっ!？」

気付かないうちに彼も目を覚ましたようで、横で同じように朝日が昇るのを見つめている。

「おはよう、望さん」

「おはよう」

「どう? 見れてよかったよね」

「うん、よかった。ありがとう」

夜が人々を絶望の淵へと突き落とす暗闇なら、日射しは人々を希望の空へと導く光明といえる。私は彼に助けてもらえたことによる感謝を、再び一日の始まりを告げる朝日が見られたことでより強く実感した。

ちよつとして彼はまだ低い太陽を見つめながら、ゆっくりとカーテンを開きいっぱいの日射し部屋に取り込んだ。

「僕、ちよつと布団片付けて、朝ごはん作るね」

「あつ、私も手伝うよ」

「いいよ。今日は望さんにとって特別な朝だからさ、しっかりと目に焼き付けておいてよ」

「そう?」

「うん。できたら呼ぶからさ」

「分かった、ありがとね、ホントに」

「どういたしまして」

彼は本当に誠実で私に対してとても優しい、せつかなので少しずつだけと確実に昇っていく太陽を、目を見開いて見つめて脳裏にしっかりと焼き付けた。

21、朝日の輝き2

昇り始めた太陽はいつの間にかこの街を目映いばかりの白い光で包み込み、窓から見えている景色は遠くまではつきりと見えるようになる。彼がキッチンに離れてから10分ほど経っただろうか、私の左肩に右の手のひらが置かれる。

「できたよ、朝ごはん」

「ありがとう」

そう言つて私が振り返ると彼の顔が目の前にあり、次の瞬間唇に柔らかな感触が当たった。それは彼の唇、私は間近で合った目を大きく見開き、二三度瞬きをする。かなり驚いたけど嫌な気持ちは全くなく、彼との初めてのキスは素直に嬉しかった。

「いや……、だったかな」

ほんの10秒ほど彼は顔を離して、私を見つめて呟いた。

「うんうん、私、嬉しい」

「そうか、ならよかった。じゃあ、食べようか」

「うん」

私が頷くと彼はパンとハムエッグがのった皿が置かれたリビングのテーブルに案内してくれた。

「座って」

「おいしそう」

シンプルだけどどちらも焼き加減はちょうどよくて、それだけで彼は料理ができると分かるものだった。

二人は向かい合つて椅子に座り、彼は自分のコップに牛乳を注いだ。

「望さんも牛乳にする？」

「お願い」

私は普段、あまり牛乳は飲まない。だけど別に嫌いではないし、大好きな彼と同じものを口にしたくて注いでもらった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

私がお礼を言っていると同時に彼が皿の前で両手を合わせる。私もそれを真似して……、

「いただきまーす!」

「いただきまーす!」

二人で元気よく声を合わせて朝ごはんが始まった。

「パンはそこにあるマーガリンとジャムをぬって食べてよ」

「ありがとう」

ハムエッグには予め少し塩コショウがかかっている。テーブルの中央にはマーガリンとラベルのないビンにオレンジ色のジャムが置かれていて、私はお箸よりもパンとスプーンを持ってそのビンを手にした。

22、朝日の輝き3

見たところオレンジ系のジャムのようだが、市販されているマーマレードみたい皮は入っていない。気になったので彼に聞いてみる。

「ねえ、これって何のジャム？」

「みかんだよ」

「みかんって……、マーマレードってこと？」

「いや、皮が入ってないからね」

「そうだよ。じゃあ、もしかして……、自分で作ったの？」

「そう、正解！ それ、僕が作ったんだ」

「すごい。ひろ君って料理好きなんだね」

「まあ、好きだね。望さんは？」

「結構してたよ。でも、ひろ君の方が上手いんじゃないかな？」

「そうかな？ でも望さんが作った料理も食べてみたいな」

「そう？」

「うん」

「それじゃあ、来週からひろ君が帰ってくるのを料理作って待つてるね」

「ホント！？ やったー！」

私が料理を作ると言って喜ぶ彼、それを見ながら手作りジャムをぬったパンを口にする。みかんの甘酸っぱい味が口いっぱいに広がり、薄皮のちよつとした苦みがいいアクセントになって、市販のジャムよりもかなりおいしく感じた。

「どうかな？」

「うん、おいしいよ！」

「よかった。そういえばさ、今日これからどうしよつか？」

「ひろ君は何か予定あるの？」

「ないよ。あつ、だからさ、望さんが着る服とか買いに行こうか？」

「いいの？ 私、今財布に1万円も入ってないよ」

「そなんだ」

「うん。なんか親が私に隠して結構借金してて、実家は持家だったんだけど相続税があつてね、結局遺産もそれでほとんどなくなっちゃったんだ」

「そつか。それじゃあ、今日は僕が出すよ。だからいろいろ買いに行く」

「いいの？ そんな私のために」

「いいよ、遠慮しないで。これから一緒に生活するんだしさ、それに僕貯金もあるから」

「ホントにありがとう。私いつか返すからさ」

「そんなのいいよ、ホントに、気にしないで」

「そう？ ホントに？」

「うん」

「じゃあ、お言葉に甘えちやあ」

「その代わり行く店は僕が選ぶね」

「うん、お願い」

私は昨日も言ったように本当に着の身着のまま、今日これから着替える服さえも昨日のものしかない。だからこそ、彼が出してくれるというのはとても嬉しくて、有り難いことだった。

23、日常と非日常1

朝ご飯を食べ終わると、二人はそれぞれ簡単に身支度を済ませ、お店が開く時間まで家でのおんびりする。朝8時が過ぎても相変わらずテレビではニュース映像が流れ、二人は時々話しながら画面を見つめている。

こんな何気ない日常の一場面だけど、僕は今まで家に誰かを泊めたことはなく一人で過ごしてきた。だからこそすぐ隣に人がいること自体が新鮮だったし、ましてや彼女となれば喜びもひとしおで、温かい雰囲気はそれだけで心を満たしてくれた。

そんな日常の空気の中にいると、昨日と全く同じ格好の彼女も少し違っただけに見える。長い髪は後ろで軽くポニーテールに結ばれていて、服は半袖の白いワンピースに白の上着を着ている。きれいな肌は全体的に肌色に近い白で服とよくマッチしていた。しかし改めてみると白に白というのは不思議な組み合わせでもある。単に一枚だけだと寒いから上に羽織っているだけかもしれないが、気になったので聞いてみる。

「ねえ、望さん」

「何？」

「白が好きなの？」

「いや、普通かな。でもどうしてそんなこと聞くの？」

「ほら、白い服着てるから」

「あつ、これね。ちょっと説明しにくいんだけど、なんたる死ぬときは白い服のほうがいいかなって」

「もしかして……、死に装束ってこと？」

「そういうこと。まあ、白に白なんてちょっと変かかって思ったけど、寒かったし、別にこれから死ぬんだからどうでもいいかなって」「そっか。なんかごめんね、変なこと聞いたみたいで」

「いいよ、気にしないで。私が勝手に着てるだけだし」

「あつ、そういえば、ホントに持つてる服ってそれだけなんだよね？」

「だね。あつ、実はね、これ下着も全部白なんだよ」

「そうなんだ」

「見る？」

「うん」

彼女から帰って来た思わぬ一言、もちろん冗談だとは分かっていたけど、見てみたい気持ちも少なからずあったし、ここは欲望に正直になつて頷いてみた。

24、日常と非日常2

彼と付き合いはじめてまだ短いけれど、ずっと一緒にいて日常を共有したことで雰囲気慣れてきて気持ちが高になっていったのか、私はよく考えもせずこんなことを言ってしまった。彼は頷いたけどきつと冗談だと分かっていたのだから。

「もう、頷かないでよ。冗談だったのに」

「そうか、やっぱり。そうだよな」

彼はそう言つとさっきまでテレビの画面と私を交互に見ていた視線をテーブルに落とす。下を向いているので表情は分からないけど、なんとなく残念そうにしているように見える。すると私は期待させて悪かったなと思えてくる。

もちろん私も全く想定していなかったわけではないし、もうちゃんとした恋人同士なのだから、こういう少しふざけたようなえっちなやり取りもしてみたかった。

「いいよ、見せてあげる」

私はそう言つて椅子から立ち上がり、彼に最もよく見えるように真正面に立つ。冗談だったとはいえ少なからず彼に期待させてしまったことは事実だし、少し恥ずかしいけど自分の身体には自信があった。

「いいの？ ホントに？ 無理しなくていいよ」

「うんうん。私、身体には自信あるから」

昨日まで自殺しようとしていたのに、なぜか前向きに考えられていたこと。それは何気ない日常が私に魔法をかける、そんなふうに感じていた。

私は一度軽く息を吐いて瞬きをすると、前屈みになりひざ下まであるワンピースの裾を両手でつかみ、ゆっくりとブラジャーが見えるまでインナーも一緒に捲り上げた。彼の視線も捲り上がっていく服を追うように動いていく。

元々体型は気にしていたし、太ってはいなかったけど、ここ1週間は惨憺たる不幸に見舞われて食欲があまり出なかったせいで痩せてナイスバディになっていた。胸もDカップはあって、食生活にも気を付けていたせい肌もきれいだと思う。

「どうかな？」

しばらく見つめるだけ何も言わないので聞いてみる。すると聞こえるくらいの音で生唾を飲み込み彼は答えた。

25、日常と非日常3

「きれいだ」

「そ、そうかな？」

「うん」

シンプルで短い彼のコメント、今まで私の身体を見くれた男の人は何人かいるけど、一番嬉しく感じられた。こういうときに聞いてもいないのにいろいろ個々のパーツをほめてくれる人がいるけど、正直デリカシーがなくてあまりいい印象は持てなかった。

「もう、いいかな」

多分2分近くは経っているだろうか、ずっと見つめられるとさすがに少し恥ずかしくなったので、終わりにしていいか聞いてみる。

「いいよ。ありがとな」

「うん」

彼に許可をもらうと私はつかんでいたワンピースの裾を離れた。

二人の日常の間に切り取られた瞬間の非日常、それは自分の冗談半分から見せることになった下着姿、ちょっと恥ずかしい思いをすることにはなつたけど、いずれお互いの裸姿を見ることになるわけだし、これから一緒に生活を続けていくためにも素直によかったと思っっている。

彼女が勇気を出して見せてくれた下着姿、それは想像していたよりもずっときれいだった。きめ細やかで肌色に近い白のきれいな肌で、足はすらりと細く、お腹も締まってくびれがあり、胸は小さくなくブラジャーによって自然な谷間ができていた。目の前に広がったあまりの絶景に言葉を失った自分、

「どうかな？」

そう少し不安気に聞いてくる彼女に、無意識のうちに生唾を飲み込み、

「きれいだ」

何も飾る言葉なくただそれだけ答えた。大体彼女は2分ほど見せてくれていただろうか、

「もう、いいかな？」

顔をちよつと赤らめて恥ずかしそうに言った。あまり長くそうしてもらうのも悪いので、

「いいよ。ありがとな」

「うん」

僕はお礼を言つて頷いた。すると彼女はつかんでいたワンピースの裾を離した。

雑誌のグラビアから感じ取れるいやらしさ、そういった不純なものは全く彼女の下着姿からは感じられなくて、内側かもしみ出していた洗練されたきれいな美しさ、それはとても特別で、瞬間何気ない日常から非日常がはつきりと切り取られた。

26、変わるごと1

僕は今彼女を後ろに乗せて車を運転し、これから一緒に服や生活用品をそろえるための店に向かっている。ただいろいろな店をいくつも回るのは面倒なので、20分ほどはかかるが、大型のショッピングモールに行くことにした。

先ほど彼女が口にしていたのだが、服よりもまず先に化粧品を購入したいと言っていた。話によると今手元には全くないらしく、今もスッピンでかなり恥ずかしいとのこと。これは化粧をすることがない僕にとってはとても不思議な感覚で、そのままでも手入れされていくきれいな彼女の顔を見るとなおさら分からない。それでもあえてその理由を想像するなら、自分をきれいに見せたいという希望はもちろん、化粧を施すことで何か気分が変わったりするのではないだろうか。そういうえば高校生の時に付き合っていた彼女が言っていた、「お化粧はね、女の子にとっておまじないのようなものだよ、分かる？」と。それからこうも言っていた、「私ね、ひろ君に告白したときいつもより赤い頬紅ぬってたんだよ、気付いた？」とも。はつきり言ってそんな頬紅のような小さな変化全く気付かなかったけど、今改めて思うとそこには告白という一大勝負に対する彼女なりの勇気と決意があつて、何か大きな意味があつたのかもしれない。さらに推測していくと今早く化粧をしたいと言っている彼女も、自殺を思っていたことへの精神的な不安を払拭し、これから新たな人生を歩んでいく、その決意を確かにするためのおまじないの意味が大きいのだと思う。

ただ人の心とは厄介なもので表面上は変わっても、変わっているかのように振る舞えても、実際はあまり変わることができていなかったりする。例えばさっきの下着姿を見せてくれたのだから、なんとかわるうとしていくらか無理をして背伸びをしているのだろう。しかし、だからといって全く悲観することはない、大切なのはどん

な些細でバカバカしいことでもいい、まずは行動を起こすことなのだから。頭で考えるだけ、心で思っているだけ、それだけでは何も始まらない。最初は何事でもやってみることから始まり、そこから得た何かが気持ちに投影されて、結果として自分が少しずつ変わっていく。

僕は彼女がとにかく行動を起こして、自分自身の力で変わろうとしている、今その姿に気が付いて確信した、絶対に立ち直ってくれらる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4843y/>

それでも私は死にたい

2012年1月14日02時50分発行